



2012.10.1

## 10月 ようちえんだより

西神戸 YMCA 幼稚園

親が子どもにかけ言葉の多くは、親の望む行動を指示したり、親自身の気持ちを子どもにぶつけたりして、親自身の期待や不安から出る言葉ではないでしょうか。「何をしているの、早くしなさい」「宿題は出来たの」「だから言ったでしょう」「もう知りません、勝手にしなさい」「どうして出来ないの」-----。当然このような言葉は、子どもが親からかけられて嫌な言葉です。反対に、子どもが親からかけられて安心できる言葉が、「大丈夫」という言葉ではないでしょうか。「失敗しても大丈夫」という言い方があるように、大丈夫という言葉には明確な評価基準があるわけではなく、現状のあるがままを受け入れてそれを認め、またそこで終わってしまうのではなく、次に繋がる余裕のある言葉なのだと思います。「大丈夫、あわてなくても良いよ」「大丈夫、またやってみたら」「大丈夫、今に出来るようになるよ」、このような言葉は、子どもの気持ちに寄り添い、また子ども自身の力を信じている親だからこそかけられる言葉ではないでしょうか。

子どもは、親は自分を信じてくれている、信頼されていると感じるからこそ、自分に対して自信を持ち、自らやってみようとする意欲が生まれてくるのです。そうではなく、親が子どもは何も分かっていない、言われなければ何も出来ないと思い、常に指示ばかりしていると、子どもも素直に従う時期もあるでしょうが、結果的には自ら決断して行動できない大人になるかもしれませんし、そんな親に反発して望ましくない行動をとるようになる場合もあります。また子どもに対して、親が過度の期待を押し付けているのであれば、これも子どもが小さなうちは、親に認められることを求めて「良い子」でいるかも知れませんが、与えられる課題がこなせなくなると、自分に失望してしまうこともありますし、本当の自分自身の気持ちを押し殺したままで成長し、生きる意欲さえ失くしてしまうかもしれません。

親子の関係は、すべてを親に委ねて依存している時期が終わり、子ども自身が自らの意志を持って動き出す頃から新しいものとなっていきます。過保護、過干渉でも、また過度の期待をかけすぎても、また無関心でいることも、望ましい親子関係とはいえません。子ども自身が子どもの世界の中で、他の子どもたちとの交わりを通して、楽しいことや悔しいこと、うれしいことや悲しいことを様々経験して、家庭に帰ってくる時にしっかりと受け止めることが出来る存在としての親でなければなりません。

大切なことは、子どもには自ら成長する力が与えられており、信頼されるからこそ、その力を発揮することが出来るのだということを、親自身が信じて子どもを見守り、そして子どものすべてを受け止めることができる親でありたいと思います。

年主題 「あふれる愛 小さきものとともに」

10月主題 「ふれあう」

聖句 “種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。”

(マルコによる福音書4章:27節)